

広島教区 社会司牧通信 2022.7~2023.2

2022 07

新企画 チャレンジコラム 『考えよう LSGs』

2022 年 7 月 1 日。私は広島で、5 年目の夏を迎えようとしています。今年は史上最短の梅雨明けといわれ、加速する気候変動を実感せずにはられません。

さて、広島に越してきた 2018 年は、6 月から 7 月にかけて各地で集中豪雨が多発しました。特に西日本では広い範囲でその被害は拡大し、今もお仮設住宅、また借り上げ住宅での生活を余儀なくされている方々がおられます。その方々とボランティア活動や行事で繋がりながら「今年の夏は無事に過ごせるとよいですね」が挨拶代わりとなりました。気象が不安定になると、心配で夜も眠れないというご連絡をいただくこともあります。新型コロナウィルスの影響も加わり、私たちの日常は見えない緊張感を伴うものとなっているのではないのでしょうか。

しかし、不安に駆られるばかりではなく私たちは、このような時にこそ、回勅『ラウダート・シ』のメッセージを思い起こしたいのです。昨年 5 月、教皇フランシスコは「ラウダート・シ・アクション・プラットフォーム」の発足を発表されました。それは、「ラウダート・シ」がメッセージで終わらず具体的なアクションであることを示しています。

LSGs (Laudato Si Goals)

- 1 地球の叫びへの応答
- 2 貧しい人々への応答
- 3 エコロジカルな経済
- 4 持続可能なライフスタイルの採用
- 5 エコロジー教育
- 6 エコロジカルな霊性
- 7 共同体としての取り組みと参加型の行動

この 7 つの目標は単に環境問題についてのみの活動ではなく、神と自然と他者との関係を全体的な視野で見つめつつ、作り直していくプロセスといえるでしょう。

これから少しずつこの 7 つのテーマをコラム形式で分かち合いたいと思います。ともに具体的な一歩を踏み出していきましょう。

援助修道会 橋本晶子

2209

チャレンジコラム vol.2 『考えよう LSGs』一地球の叫びへの応答

援助修道会 橋本晶子

9 月 1 日より、世界のカトリック教会はエキュメニカルな交わりのなかで、「被造物の季節」を過ごしていきます。教皇フランシスコは「被造物を大切に世界祈願日」のメッセージにおいて、「被造物の悲痛な叫び声に声を合せて泣き、それに耳を傾け、行いをもってこたえることを強く勧めています。それはエコロジカルな回心の最初のプロセスともいえるでしょう。

ラウダート・シのゴール「LSGs」では、地球の叫びへの応答として具体的に、「再生エネルギーの利用拡大と化石燃料の削減」「生物多様性の保護」「清潔な水へのアクセスの保証」などを挙げています。特に私たちが注目したいのは、化石燃料に関しての日本の現状です。日本は資源に乏しいこともあり、エネルギー供給の 8 割以上が化石燃料に頼っています。日本の温室効果ガスの排出量は全体として減少傾向にありますが、CO₂ 排出量は世界で 5 番目です。(中国・アメリカ・インド・ロシア・日本の順)しかし、これを 1 人が 1 年間出す二酸化炭素の排出量(CO₂ 換算)で比べると日本は 8.9 トンで 3 位に浮上します。つまり私たちの生活は地球温暖化の原因となる二酸化炭素などをより多く出す生活なのです。

私たちは痛みや、病気になってはじめて治療に取り掛かります。ですから、この生活がどれほど地球に痛みを与えているのかを実感しなければ、改善していくことは難しいのかもしれない。だからこそ聴きましよう。地球が何を叫んでいるのかを。

チャレンジ！1日1キロのCO₂削減例

◆冷房の設定温度、暖房の設定温度の見直し

冷暖房の設定温度が2度変わるだけで、1日あたり約90gの削減ができるといわれています。

◆照明は電球から蛍光灯LEDに

エネルギー消費量の少ない照明器具で1日あたり45g削減が可能になります。

◆主電源をなるべく消す（待機電源を減らす）

主電源を消す、使わない電化製品のコンセントを抜く等の省エネで1日あたり100g削減になります。

◆シャワーの時間を1日1分短く

1分短くすることで1日70gの削減になります。

◆1日5分のアイドリングストップ

5分間アイドリングを短くすることで1日60gの削減になります。

◆エコバックの使用

レジ袋を使用しないことで1日50gの削減になります。

2210

チャレンジコラム vol.3 『考えよう！SGs』一貧しい人の叫びへの応答

援助修道会 橋本晶子

修道会の修練で、釜ヶ崎（大阪西成あいりん地区）を訪れた時のことです。炊き出し活動に参加する予定でしたが、大勢のボランティアが来られていたため、すっかり行き場を失っていました。すると背後から声が聞こえたのです。「ねぇちゃん！仕事にあぶれたんならこっちおいで。一緒に並ぶぞ！」その声を探して振り向いてみると、一人のおっちゃんが手招きしているのです。躊躇している私にそのおっちゃんは、並んだ列から外れ、私を迎えに来てくれました。そして最後尾と一緒に並ぶことになりました。

その時の私は、当然「ボランティアなのに、食べてはいけない！」と思っていたのです。どのようにこの列から外れようかと考えていたとき、そのおっちゃんは「一度はこの列に並ぶことを体験しなさい」と言ったのです。私は、はっとさせられました。そして、私はその列に並びうどんを受け取り、おっちゃんたちと一緒にいただきました。

無意識のうちに「渡す側である」と思っていたことに、恥ずかしさを覚えたその経験を、今でも忘れることはありません。それは優しいおっちゃんのまなざしをとおして、私の叫びに答えてくださったイエスに触れた経験でもありました。

今では、夜回りや子ども食堂の活動のなかで、「一緒に」いただくことを大切にしています。「わたし」から「わたしたち」になっていきますように。ラウダート・シ特別年の祈りを思い起こしましょう。

ラウダート・シ特別年の祈り

いつくしみ深い神、天地万物の造り主よ、
わたしたちの思いを解き放ち、心に触れてください。
あなたのたまものである被造物の一員でいられますように。



この過酷な日々の中で苦しんでいる人、とくにもっとも貧しい人と弱い立場にある人に寄り添ってください。

感染症の世界的流行に立ち向かう中で、創造的な連帯を示すことができるよう支えてください。

共通善を探し求めるために、変化を受け入れる勇気をお与えください。

皆が互いに結ばれ、支え合っていることを今ほど感じられるときはありません。

地球と貧しい人々の叫びに耳を傾け、応えられるようにしてください。

今のこの苦しみが、兄弟愛にあふれ、持続可能な世界を築くための産みの苦しみとなりますように。

扶助者聖マリアの優しいまなざしのもと、わたしたちの主キリストによって祈ります。アーメン。

2211

チャレンジコラム vol.4 『考えようL S G s』—エコロジカルな経済

援助修道会 橋本晶子

1995年の阪神淡路大震災より、災害支援に関わるようになり、東日本大震災では福島県で、被災者となる経験をしました。それは死を覚悟する事態のなかで、自分のいのちは勿論のこと、他者のいのちを守ることに真剣であった出来事として心に刻まれています。そして同時に、私も他者に守っていただく経験を多くいたしました。3月は東北ではまだ寒さの厳しい時期です。失ったものが多い中で、わずかなものを分かち合いながら、肩を寄せ合い過ごした日々を忘れることはありません。

私にとっての「エコロジカルな経済」とはこのような生き方だと思っています。自然の叫び声や傷にふれながら、自分のいのちを守り、他者のいのちを守ること。それは神さまの秩序である「調和」を生きることに繋がるのだと実感します。調和という言葉は美しい響きを持っていますが、自分を小さくしなければ、生み出されないものだと思います。自分が大きければそれは、不協和音として鳴り響いてしまうのです。だからこそ「回心」が必要とされるのでしょうか。大量生産、大量消費、大量破棄のスパイラルは、不協和音として、この世界を苦しめているのではないのでしょうか。

エコロジーは、生態学を表す言葉と環境保全を表す言葉として使われています。後者は語源であるギリシア語のオイコス（家・家族）を意識づけた意味があると考えられています。私たちの家、私たちの家族は、今どのような状況になっているのでしょうか。そして、その一部である私自身の内的調和は保たれているのでしょうか。エコロジカルな経済は、私の回心のプロセスそのものといえるのです。

ラウダート・シ 目標

3. エコロジカルな経済

エコロジカルな経済は、経済というものが人間社会のサブシステムであり、人間社会は生物圏の一部であり、その生物圏は私たちがともに暮らす家であることを認識している経済です。

2212

チャレンジコラム vol.5 『考えようL S G s』—持続可能なライフスタイルの採用

援助修道会 橋本晶子

少しずつ、日本でも浸透し始めたサステナビリティ（サステナブル）—「持続可能」という言葉ですが、それでもまだつかみにくいですね。簡単にいうなら、環境や社会にやさしいということです。そしてその生活様式は、単に現状を否定し、生活を大幅に変えようと無理をすることではない、ということでもあります。

最近、私の関わる若い世代のなかには、車や畑をシェアする「シェアリングエコノミー」や、自然のものや廃材を利用した雑貨制作に取り組む方、フェアトレードの商品を暮らしに取り入れる方が増えてきています。彼らは、関わりを深め、喜びあっていく生活様式に関心を持ち始めているのです。そもそも喜びがないことを、持続することは難しいことだと思います。

すべてを手放し、貧しさの中で生きたアシジの聖フランシスコは、より神と他者と自然と自分自身への調和に開かれました。教皇フランシスコは、彼を総合的エコロジーのお手本としています。

主の降誕を祝う私たちは、究極のシンプルライフのなかにお生まれになったイエスを見つめていきたいと
思います。新しい年がより私たち自身を癒し、そして優しさが広がっていくものとなりますように。

「何のためにわたしは生まれたのか」 ランベルト・ノーベン

神は言われる。

私は裸で生まれた、あなたが自我を脱ぎ捨てるために。

私は貧者に生まれた、あなたが私を唯一の富とみなすために

私は家畜小屋で生まれた、あなたがどんな場所をも聖とするために。

神は言われる。

私は弱者に生まれた、あなたが私を怖がらないように。

私は愛のために生まれた、あなたが私の愛を疑わないように

私は夜中に生まれた、私がどんな現実でも照らせることを

あなたに知ってもらうために。

神は言われる。

私は人間として生まれた、あなたが神の子となるために

私は被害者に生まれた、あなたが困難を受け入れるために。

私は質素な者に生まれた、あなたが粉飾を捨てるために。

私はあなたの中に生まれた、あなたを通しあなたと共に

すべての人を父の家に連れて行くために



2301

チャレンジコラム vol.6 『考えようL S G s』—エコロジー教育

援助修道会 橋本晶子

2023 年の始まり、皆様はいかがお過ごしでしょうか？何か新しく決意されたことがありましたか？

今年も引き続き、回勅『ラウダート・シ』が示す目標に向かうための、7 年間のプロジェクト「ラウダート・シ・アクション・プラットフォーム」の具体的なテーマを意識していきます。今回は 5 つ目の「エコロジー教育」です。

さて、回勅『ラウダート・シ』の最終章には、「環境教育と霊性」というテーマがあげられています。私たちはエコロジーな回心へと開かれていきたいのですが、なかなか日々の習慣や、態度を改めることは容易ではありません。そこで回勅には、「すべての変化には動機と教育的歩みが必要です」（15）と教育についての重要性が強調されています。そしてその教育は「学校、家庭、コミュニケーション手段、要理教育」といったすべての教育環境を巻き込まなくてはなりません」（213）とあらゆる方法を、模索する必要性が示唆されています。これは単に、青少年の学びのことだけを言っているわけではありません。教皇フランシスコは、「信仰からくる観想的な眼差しを持つ」ことが、日常生活の態度に影響を与えると述べています。一体その眼差しとはどのようなものなのでしょう。

観想的な眼差しを持つことの具体的な例として、教皇は、シメオンの「霊に導かれて神殿に行く」、「幼子の中に救いを見出す」、「幼子を腕に抱く」という 3 つの動きに注目し、説明しています。そして毎日神殿に行き、待ち、祈っていたシメオン、アンナの忠実さを称えるのです。聖霊に動かされたシメオンは、小さく貧しい幼子のうちに救い主を見出しました。さらに幼子を抱く—優しく大切に受け入れていく態度が示されます。教皇は教育をとおして「受容」を学ぶと語られるのです。

私たちは知識、霊性どちらも学び深めることにより、動機として水の節約や、ごみの分別等、日常的な態度の変化に繋がっていくのではないのでしょうか。聖霊の動きを感じながら、内的に促されることに注意深くっていききたいですね。祈り合いながら、私たちの「共通の家」のために、優しさが溢れていく 2023 年でありますように。

世界の気候変動カルタの貸し出しも
行っています。大人もお子さんも一緒に
楽しみながら学べるカルタです！



Sr 橋本「チャレンジ LSGs」の分かち合いを始めています。2023 年5月までの日曜日に、小さなグループでの分かち合いやワークショップ等、様々な要望に応じています。（無料）

2023.2

チャレンジコラム vol.7 『考えよう LSGs』ーエコロジカルな霊性

援助修道会 橋本晶子

四旬節に入りました。祈りと節制と愛の業に励むこの季節は、エコロジカルな霊性を深める、恵みの時でもあります。

「心の平和は、エコロジーや共通善を大切にすることと密接にかかわっています。なぜなら心の平安が真に味わい尽されるならば、人生についてより深く理解させてくれる、驚くという力を備えた調和あるライフスタイルにそれが表れるからです。」（『回勅 ラウダート・シ』第6章 225 項）

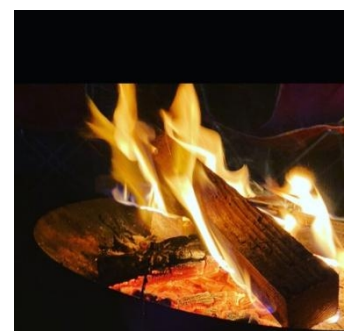
教皇フランシスコは、猛烈な活動へと駆り立て、多忙さを感じさせる深刻な不安定さから、落ちついた調和を回復するようにと促しています。それは、イエスがそのような落ち着きと注意深さのなかで、全ての出来事に向き合ったからでしょう。

先日、静かな山間の農村を訪れる機会がありました。薪ストーブを焚き、その上でご飯が炊かれます。困った方から助けを求められれば、みんなで助けに行き、新しい方が来られれば歓迎するコミュニティーがそこにはありました。一つひとつ時間がかかります。それでも、何か温かさと、幸せが漂う関わりを体験しました。落ち着いた調和とは、何もしないでじっとしていることではありません。しかし、識別のためにイエスのように立ち止まり、見つめ、触れ、祈る静かなプロセスを必要とするのだと思います。

「霊性」という言葉は、難しく感じますが「心のあり方」と私は考えています。わからなくなったときは、イエスを見つめます。イエスはどのようなことに心を動かし、行動し、祈っていたのか。そのようにイエスを見つめると、おのずと、自分自身が的外れな状態にいることに気づくのです。

この四旬節の間、心の平和を願い、癒しを願う旅を続けましょう。私たちの心が、よりイエスに触れていくとき、被造界との調和にも、優しさのうちに開かれていくのでしょうか。

薪を囲んでの分かち合いを
青年数人と行いました。
薪を囲むことで、なぜか
落ち着き、癒されるひとときでした。



2023.3

チャレンジコラム vol.8 『考えようL S G s』一共同体としての取り組みと参加型の行動

援助修道会 橋本晶子

回心の旅であるチャレンジコラムも最終回を迎えます。今日は、最後のメッセージを沖縄辺野古の海からお届けします。

3月5日は、「珊瑚の日」として1996年自然環境や野生動物保護を担う、世界自然保護基金（WWF）によって制定されました。この日に合わせ、学生たちと「環境と平和」をテーマにしたフィールドワークに訪れています。

さて辺野古は、みなさまもご存知のとおり、「辺野古新基地建設問題」に揺れる地区です。しかし本日の3月5日（日）辺野古の海には、私たちしかおりません。基地の工事車両も、反対の座り込みの方々もおられず、ただ静かな海が広がっています。この静けさを味わいながら、本来の神さまの秩序の世界を味わっています。ありのままの姿がそこにあるということは、どれほど幸せで豊かなことでしょうか。この海の前で私たちは分かち合いをしました。沖縄で出会った方々の葛藤、基地を見つめた感覚、触れた自然、誰かを批判したり、否定したりするのではなく、私は何を感じているのか、何を大切にしたいのかを具体的に言葉にしていきました。それが私たちの「Save The Coral」のプロジェクトとなり、回心の旅になりました。学生たちは、その後シーグラスを集め始めました。それで「新基地NO」のプラカードを作るそうです。

私たちは、講演会やセミナーあるいは黙想会に参加すると、「何か始めなければならない」そのように思います。しかし思いだけで終わってしまう、流れてしまうことが度々あります。だからこそ、共に歩む仲間、共同体の存在が不可欠なのだと思います。回心は必ず小さな行動を伴い、変革に向かうのでしょうか。

「皆がともに暮らす家を保護するという切迫した課題は、人類家族全体を一つにし持続可能で全人的な発展を追求するという関心を含意しています。というのは、物事は変わりうると、私たちは知っているからです。」（教皇フランシスコ『ラウダート・シ』13）

ラウダート・シ公布5周年の2020年にバチカンのインテグラルエコロジー教皇庁部局間協働作業グループから出された本が、日本語に訳され、中央協のホームページで無料公開されています。ラウダート・シの実践のためにとても役に立つ本ですので、どうぞダウンロードしてお読みください。

laudato_si_5y.pdf
(catholic.jp)



辺野古のグラスビーチ

[映画「The Letter」](#) | [ラウダート・シ部門](#)

